社　会　科　学　習　指　導　案　　【当日版】

２年１組　男子 24 人　女子 16 人　計 40 人
指　導　者　　北　岡　　聡

１　単元名　「世界と比べた日本の地域的特色～自然環境～」

２　単元について

この単元は、学習指導要領地理的分野の大項目「（２）日本の様々な地域」の中項目「イ　世界と比べた日本の地域的特色」に位置付けられる。この中項目「イ　世界と比べた日本の地域的特色」では、世界的視野や日本全体の視野から見た日本の地域的特色を取り上げ、我が国の国土の特色を様々な面から大観させることをねらいとしている。その中でもこの単元は小項目「(ア) 自然環境」に関連しており、地形や気候、自然災害や防災への努力を取り上げることを通して、日本の地域的特色を自然環境に関する面から大観させることをねらいとしている。

日本は、自然環境の特色の中でこれまで多くの自然災害に見舞われてきた。地震や洪水などの多様な自然災害の発生しやすい地域が多く、人々は古くから防災対策に努めてきた。先人たちは、堤防を築く、適切な避難方法を伝承するなどの防災面での努力を重ねながら暮らしを営んできており、その上で自然条件に合わせた産業や文化などが形成されてきている。この国土で安定した生活を送っていくためには、自然環境の保全とともに防災が重要であり、このことからも、防災への努力は我が国の自然環境と切り離しては考えられないものであるといえる。

防災の対策はハード面とソフト面の大きく２つに分類される。ハード面の対策とは、官主体で行われる施設整備など、洪水を起こさない対策のことである。この対策を行えば、維持管理がほとんど不要である、適切な対策を実施すれば洪水による被害の多くを防ぐことができるという長所がある反面、多額の費用がかかる、完成までに時間がかかる、住民は万が一に被害が起こる可能性については想定していない、などの短所がある。これに対してソフト面の対策とは、住民や地域が主体で行うものであり、施設としてあらわれない対策のことである。この対策には、人命損失を減らすことができる、費用がそれほどかからないなどの長所がある反面、習慣化しないと効果を発揮しない、物的損害は軽減できないなどの短所がある。これらハード面とソフト面の対策の連携を図り、地域の実情に合わせてバランスのよい対策を計画し実施していくことが望まれている。

生徒たちはこれまで、世界の様々な地域における文化や歴史、そこに住む人々の暮らしぶりに高い関心をもち、意欲的に学習に取り組んできた。また、これらの学習を通して、多くの国々がその土地特有の自然環境や歴史環境を生かしながら、工夫してよりよく生活しようとしている姿を捉えることができた。自然災害に対しては東日本大震災の記憶がまだ強く残っており、復興や防災ということに興味や関心が強い。プリテストにおいて水害の対策について考えられることを記述した際には、堤防や貯水池、排水路などをつくるといったハード面での対策にはよく目が向いている。しかし、避難訓練をする、地域のコミュニティを大切にするなどの防災に対するソフト面の視点がまだ根付いていないといえる。

そこで本単元では、防災に焦点を当てて学習を進める。日本の自然環境についてその特色を概観した上で、本時において生徒はある仮想の都市Ｎ市の市民という設定のもとで水害に対する防災対策について考えるという場面を設ける。Ｎ市とは、新潟県長岡市をモデルとしており、その地域的特色を参考にしながらも防災対策などは架空のものとした。ハード面とソフト面をそれぞれ重視した二つの対策案について、資料を基にどちらの案がよいかを考え、自分の意見とその根拠を明確にした上でそれぞれの案の立場から討論を行う。それぞれの案のよさと課題について比較・検討することで、バランスのとれた防災を行っていく必要があるということを理解させたい。と同時に、自分たちが置かれている自然環境をもう一度見つめ直しながら、自然環境と人々の生活の関わり方について考えを深めさせたいと考える。最終的には、今後重視されるであろう防災的な観点から県、市町村、地区を見ることができる能力を育みたい。このことは、学習指導要領解説社会編の「２　社会科改訂の趣旨」の「（ｉ）改善の基本方針」にある、「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する」ことにも大いにつながるものである。本単元では、Ｎ市の防災対策について討論することを通して擬似

的に「参画する」ことになる。「A案がよい」などの価値判断をするための根拠となるのがN市の状況などの様々な知識であり、自然環境などの概念である。この価値判断について吟味していくことで、知識や概念が体系的なものとしてとらえることができるようになると考える。

3　単元の目標

（1）　世界的視野から見た日本の地域的特色や、日本全体の視野からみた大まかな国内の地域差に関心をもち、それらを意欲的に追究し、捉えることができる。【関心・意欲・態度】

（2）　世界と比べた日本の地域的特色を、自然環境の観点を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。【思考・判断・表現】

（3）　防災という側面から「どうしたらよいのか、どの解決策がより望ましいのか」について様々な面から思考し，既習の事柄や新たな資料を明確な根拠として価値判断を行うことができる。【思考・判断・表現】

（4）　自然環境からみた日本の地域的特色に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択することができる。【技能】

（5）　適切に選択した情報を基に、日本の地域的特色について読み取ったり、図表にまとめたりすることができる。【技能】

（6）　世界的視野や日本全体の視野からみた「日本の自然環境」について理解し、その知識や概念を身に付けることができる。【知識・理解】

4　全体計画（全９時間）

第１次　世界と比べた日本の地形の特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３時間
第２次　世界と比べた日本の気候の特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間
第３次　日本の様々な自然災害と防災・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３時間（本時3/3）
第４次　日本の自然環境の特色まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

5　本時の学習

（1）　ねらい

Ｎ市がとるべき防災策について自分の立場の案の利点をハード防災、ソフト防災の両面から思考し、根拠を明確にして価値判断を行うことができる。

（2）　本時の付けさせたい力

防災という側面から「どうしたらよいのか、どの解決策がより望ましいのか」について様々な面から思考し、既習の事柄や新たな資料を明確な根拠として価値判断できる力（価値判断力）

（3）　取り入れる言語活動

討論する

（4）　期待する効果

課題を「これからN市はどの防災に力を入れていけばよいか」として、生徒一人一人が提示された二つの防災案（ハード面重視の案とソフト面重視の案）のどちらを選ぶかについて価値判断する場面を設定する。生徒たちがどの防災に力を入れるかというテーマと出会ったとき、単元前半で学んだ我が国の自然環境の特色について想起するとともに、自然災害のメカニズムや様々な防災対策がもたらす効果などの資料を基に自分なりの解釈で防災案の是非について判断するであろう。しかし、その判断は感情に左右されていたり、事象の一方的な見方が根拠になったりする場合がある。そこで本時においては、「討論」という言語活動を取り入れることとした。そうすることで、ハード面とソフト面の両面からより望ましい解決策を考えられるようになり、一人一人が行う価値判断をより合理的で、多面的な見方に基づいたものへと高めていくことができると考える。

（5）　展開

学　習　活　動	指導上の留意点 （言語活動との関連）
○　本時の学習課題を確認する。 これからＮ市はどの防災に力を入れていけばよいか （A案）完成まで５年間 ○雨水貯留施設を建設し、河川への雨水流出量を減らすことで、洪水にならないようにする。（１０億円） （B案）５年間継続　→（２億円×５年＝１０億円） ☆町内会などの自主防災組織の活動支援補助金（0.８億円） ☆市民防災安全大学を開校し「防災安全士」を育成（0.１億円） ☆洪水ハザードマップの全世帯配布と説明会開催（0.１億円） ☆エリアメールサービス（緊急災害情報伝達サービス）対応携帯電話機種購入のための補助金（1億円）	・前時にまとめた自分の考えを確認するとともに、価値判断を行う活動であることを意識させる。
○　防災案について、全体で話し合う。 【A案】 ・　梅雨などの豪雨に見舞われやすいＮ市だからこそ、根本的に洪水を防ごうとする貯留施設をつくると安心できる。 ・　大がかりな工事ではあるが、その後の対策にお金をかける必要がとても少なくなり、効果がずっと続くといえる。 反論 △　施設を充実させたがゆえに油断して被害が大きくなった事例がある。施設をつくるだけでは、命は守られないのではないか。 △　完成までの間に洪水が起きたら意味がないのではないか。 反論への反論 ・　万が一に備えることも大切だが、その時に避難をする時間を生み出すためにはハード面の対策が必要不可欠だと思う。 ・　これまでの水害の履歴から考えられる想定では、豪雨に見舞われる前に完成させることができると考えられる。 【B案】 ・　Ｎ市の地図を見比べると、若い人が多く住む場所は自主防災組織の組織率が低い上に、大きい浸水被害が想定されている。こういう場所こそ、組織率を上げる取り組みをして防災への意識を上げることで、住民は安心して暮らせると思う。 ・　この市がある地域は梅雨や台風の影響で大雨が降ることが多いが、地震も起きやすい土地だといえる。防災意識を高める活動は、洪水だけでなく、多くの災害に対して有効である。 反論 △　訓練をしてもそんな簡単に効果が上がるわけではない。そのとき意識が高まっても持続するのか。 △　人の命が守られても、土地や家などの財産は守れない。財産をなくしては、人は生きる気力をなくすのではないか。 反論への反論 ・　訓練などを通して防災への知識をもてばある程度の効果がすぐに目込めるし、これを５年間繰り返し行うことで、かなりの意識の定着を見込める。 ・　命があればまた新しいスタートができる。みんなで力を合わせて再建していくつながりを強める意味でも、自主防災組織などの活動を支援することが必要である。	・ワークシートを基に生徒の意見を把握し、意図的指名が行えるようにしておく。 ・Ａ案は赤、Ｂ案は青、折衷案は緑のカードを胸ポケットに入れておき、立場が変わった場合はカードを変更するなど、常に自分の立場を明確して発言できるようにする。 ・意見は根拠を明確にして述べるように助言する。 ・それぞれの立場について理由を述べさせた後、反論を述べさせる場面を設定する。 ・反論を通してそれぞれの案について吟味していく際には、意見の内容をその都度整理するようにし、論点がずれないように助言する。

【両方の案の折衷案】 ・　貯留施設の規模を抑えて、自主防災組織の支援に回してはどうか。ハード面をある程度充実させながら、避難体制の理解を広めるなどの地域の防災意識を高めていくことで、万が一に強くなる。 反論 △　洪水が起きた場合は、ソフト面を充実させても建物や施設などの物的損害は軽くならない。ハード面の充実こそ命と財産の両方を守ることができる。 反論への反論 ・　施設の充実と意識の向上はどちらかだけがよくなっても防災・減災としてはうまくいかないのではないか。この折衷案が一番とは限らない。両方のよりバランスのよい方法を見付け出していくとよい。	・A案、B案、折衷案に分けるとともに、理由と反論を整理して書くなど構造的な板書にする。
○　本時の話合いを通して考えたことをペアで話し合う。 ・　河川整備はもちろん大切だが、住民一人一人がどう災害と向き合うかという意識は忘れてはならないと思う。 ・　命を守る施設整備を市が考え、命を守る意識を住民一人一人が高めていくという歩み寄りがあって初めて多くの命が救われると思う。 ○　課題について分かったことや討論を通して考えたことをもとに、自分の考えをワークシートにまとめる。 ・　ハード面とソフト面の両面から防災について考えていくことが大切であると思った。一番バランスが取れているところを見付けていかなくてはいけない。 ・　両面からみるという意識があれば、日本のどの地域にいってもどのような災害にも対応できる人間になれるのではないかと思う。	・自分が討論を通して考えたことを相手に伝えることによって、全員が自分の考えを述べるようにする。 ・最後に自分の考えを書き表すことで、より望ましい解決策を考えるようにする。

(6)　評価

N市がとるべき防災策について自分の立場の案の利点をハード防災、ソフト防災の両面から思考し，根拠を明確にして価値判断を行うことができたかどうかをワークシートや発言から評価する。

【思考・判断・表現】

7　参考・引用文献

＜方法に関するもの＞

・岡崎誠司 2013『見方考え方を成長させる社会科授業の創造（社会科の授業改善１）』風間書房
・小原友行編著 2009『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン中学校編』明治図書
・小原友行・永田忠道編著 2011『「思考力・判断力・表現力」をつける中学地理授業モデル』明治図書
・日本社会科教育学会編 2008『社会科授業力の開発　中学校・高等学校編～研究者と実践化のコラボによる新しい提案～』明治図書
・堀内一男・大杉昭英・伊藤純郎編著 2009『平成２０年度改訂中学校教育課程講座社会』ぎょうせい
・文部科学省 2008『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版
・文部科学省 2012『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【中学校版】』教育出版
・井門正美 2003『町づくりゲーミング SIMTOWN【井角町】』NSK 出版
・藤原孝章 2008『ひょうたん島問題　多文化共生社会ニッポンの学習課題』明石書店

＜内容に関するもの＞

・牛山素行著 2008『豪雨の防災情報学』古今書院
・国土技術政策総合研究所 2007『都市地域の社会基盤・施設の防災性能評価・災害軽減技術の開発』国土技術政策総合研究所プロジェクト研究報告第 14 号，p.104－108
・梶秀樹・塚越功編著 2007『都市防災学　地震対策の理論と実践』学芸出版社
・瀧本浩一著 2008『地域防災とまちづくりーみんなをその気にさせる災害図上訓練ー』イマジン出版
・辻本哲郎編著 2005『豪雨・洪水災害の減災に向けて～ソフト対策とハード整備の一体化～』技報堂出版
・中田実・山崎丈夫・小木曽洋司 2004『新　自治会・町内会モデル』自治体出版社
・中村八郎・森勢郁生・岡西靖著 2010『防災コミュニティ　現場から考える安全・安心な地域づくり』自治体研究社
・永松信吾・林春男・河田惠昭著 2005「地域防災計画に見る防災行政の課題」『地域安全学会論文集』地域安全学会，7，p.395－404
・二宮洸三著 2011『防災・災害対応の本質がわかる本』オーム社
・林紀代美・青木賢人 2011『津波に備える人々と地域～震災前の南三陸町の取り組みから学ぶこと～』古今書院　地理６月号 56－6，p.96－101
・山崎丈夫 2003『地域コミュニティ論―地域分権への協働の構図』自治体研究社
・矢守克也・渥美公秀編著 2010『防災・減災の人間科学』新曜社